

資料

基礎看護教育における清拭演習についての研究動向

佐々木 律子・青木亜砂子*

(2021年1月7日受稿)

I. 緒言

近年の高齢化の進展や医療の高度化などに伴い、臨床場面で実施される援助方法や使用される物品などについては、日進月歩で進化している。一方で、看護基礎教育の現場では、原理原則に基づいて教授するため、臨床と教育現場での乖離が指摘されている¹⁾²⁾。特に日常生活援助に関する基礎看護技術の中で、学内演習や臨地実習で比較的學生が体験する機会の多い技術として「清拭」があげられるが、多くの医療機関では、綿の蒸しタオルのBacillus cereus菌感染の問題³⁾⁴⁾もあり、ディスポーザブルウェットタオルが使用されるようになるなど、清拭の方法や使用物品が従来の方法から変化してきている。臨床と教育現場での乖離という問題については、その差をなくすことが大切であるが、患者や清拭の目的に合わせ、効率的かつ効果的な清拭の方法が選択できることがどちらにおいても必要と考えられる。そのため、看護教育機関においては、この乖離をうめるべく、どのように清拭演習が工夫されているのかその動向を把握する必要がある。また、限られた時間の中で基礎的な実践力を身に付けることが求められている昨今、基礎看護技術の演習内容を細部にわたり厳選し、より効果的なカリキュラムを検討することが求められている。

II. 目的

本研究の目的は、基礎看護教育における「清拭」技術の演習に関する研究の内容を分析し、その研究の動向を明らかにし、今後のこの領域における

基礎的な資料を得ることである。

III. 方法

1. 文献検索の方法

医学中央雑誌Web版 (Ver.5) を用いて、2018年10月に2004～2018年の15年間の範囲で国内文献の検索を行った。Key wordは、「清拭」「演習」、「清拭」「看護技術」でそれぞれand検索を行い「原著論文」で絞り込みを行った。検索の結果、「清拭」「演習」では、61件の文献が得られたが、このうち基礎看護学領域の文献に該当する16件を対象として選定した。また、同様に「清拭」「看護技術」については、36件を対象として選定したが、重複していた文献を除外した結果、最終的に23件を分析対象として選定した。

2. 分析の方法

分析対象となる23件の文献を精読し、研究の概要と研究内容（「掲載年」「対象」「研究目的」「清拭演習の内容」）について該当する内容を各文献から抽出し、全体を概観した。また、研究内容を精読し、研究の主要なテーマについて、内容の類似性からカテゴリ化し分析した。さらに、「臨床現場と教育内容との乖離」、「清拭演習の内容」の詳細が記載のある文献についてその内容を整理し分析した。

IV. 結果

1. 文献の概要

文献の概要については、表1に示す。

選定した23件の文献の掲載年次は、2006、2008年に各4件^{9) 10) 11) 12) 14) 15) 16) 17)}、2005、2012年に各3件^{6) 7) 8) 21) 22) 23)}、2009、2014年に各2件^{18) 19) 24) 25)}、2004、2007、2011、2015、2016年に各1件^{5) 13) 20) 26) 27)}であった。研究対象については、看護学生が15件^{5) 6) 7) 9) 10) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 23) 25) 26)}と最も多く、次いで臨床の看護師を対象とした文献が6件^{8) 11) 12) 13) 24) 27)}であった。また、国内外の教科書や文献を分析対象とした研究が1件¹⁴⁾、清拭時に使用するお湯の温度の管理についてエビデンスを検討するための実験について記載されている文献が1件²²⁾であった。また、23件の文献のうち「清拭演習の内容」の詳細が記載されている文献は7件^{5) 10) 15) 19) 23) 24) 26)}であった。

表1 分析対象文献の概要

		総数23件
掲載年	2004	1
	2005	3
	2006	4
	2007	1
	2008	4
	2009	2
	2010	0
	2011	1
	2012	3
	2013	0
	2014	2
	2015	1
	2016	1
研究対象	看護学生	15
	看護師	6
	文献等	1
	その他	1
	「清拭演習の内容」の詳細が記載	
	あり	7件
	なし	16件

2. 研究内容について

研究の内容のカテゴリについては、表2に示す。

分類内容のカテゴリは「看護基礎教育と臨床現場の清拭技術の乖離に関する研究」、「清拭の演習内容の評価に関する研究」、「清拭技術の習得度に関する研究」、「清拭方法のエビデンスに関する研究」の4つに分類された。また、「看護基礎教育と臨床現場の清拭技術の乖離に関する研究」につい

ては、研究結果の中で乖離とされている内容について整理した。

1) 「看護基礎教育と臨床現場の清拭技術の乖離に関する研究」

この研究については6件^{8) 11) 12) 14) 24) 27)}の研究がされていた。臨床現場と教育内容との乖離となっている部分については、表3に整理した。

「教科書と臨床研究論文との比較の研究」¹⁴⁾の内容は、現在使用されている国内外の基礎看護技術の教科書内容の比較と臨床現場での状況を検討するため清拭に関する文献を分析し、教科書では「石鹸+ウォッシュクロス+お湯」を用いた清拭がスタンダードであるが、現場では「温タオル」を用いた清拭が普及していること、石鹸清拭は熟練した看護師でも実施に時間を要し、効率の良い方法が模索されている段階であること、これらの違いから使用物品にも変化があることが示されていた。「臨床現場の実態調査から教育内容との相違を検討した研究」^{8) 11) 27)} (3件) では、臨床現場では蒸しタオル (もしくは、タオルのみ) で清拭することが多く、お湯や石鹸の使用が少ないこと、ピッチャーやバケツ、ベースン、ウォッシュクロスが使用されなくなっていること、学校で習った方法を行わない理由として「業務が忙しくて、時間的余裕がないこと」「学校で習った方法は時間が掛かる」ので、「できるだけ短時間で行うことで患者に負担を掛けたくない」と考えていることが明らかとなっていた。「臨床での清拭の観察と学内演習の相違を検討した研究」^{11) 24)} (2件) では、学内での演習方法との違いがみられた清拭の看護技術の方法は、清拭の対象者、清拭方法 (お湯は用いない)、陰部の清潔方法 (清拭ではなく陰部洗浄をする)、清拭をする部位の順番であった。さらに、臨床では、「露出を最小限にする」「プライバシー保護のため、バスタオルで覆う」はされていないという実態が示されていた。

2) 「清拭の授業内容の評価に関する研究」

この研究については、12件の研究が行われていた。

表2 研究の内容の分類

カテゴリ	サブカテゴリ	研究の内容	総件数23件 件数
基礎教育と臨床の技術の乖離に関する研究 (6件)	教科書と臨床研究論文との比較	教科書に記載されている全身清拭の方法と臨床での研究論文を比較し教育内容を検討	1
	臨床の実態調査と教育内容の相違	臨床での清拭等の援助技術についての実態調査をし、教育内容の改善を検討	1
		清拭などの看護技術の実践内容や根拠について看護師に実態調査を行い看護技術の課題を検討	1
		清拭に関する看護師の認識と実態から教育内容との相違の要因の明確化	1
清潔技術の習得度に関する研究 (5件)	臨床の実態調査と教育内容の相違	臨床での清拭場面の観察からえられた看護技術の方法と学内演習の看護技術の方法を比較し教育内容を検討	2
		全身清拭などの技術習得度の自己評価と技術習得に活用した学習方法の調査	1
		臨床実習における看護技術の経験状況から技術水準への到達状況の分析	1
		臨床実習後の教育内容の習得状況の分析	1
		全身清拭の技術習得における困難の内容の分析	1
清拭の演習内容の評価に関する研究 (10件)	事例を用いた演習の評価	全身清拭の患者役体験による学習の考察	1
		事例設定による全身清拭演習の学習効果の考察	1
	教員や先輩学生参加型演習の評価	先輩看護学生参加型の演習の有効性の検討	1
		教員が模擬患者で参加した演習の技術習得状況の変化の考察	1
		教員が清拭の援助技術を提供することによる学習効果の考察	1
	授業プログラムの工夫の評価	標準の全身清拭と患者選択型の全身清拭の方法の違いによる効果的な演習方法の検討	1
		看護行為を自選する能力育成のための教育プログラムの評価	1
		清潔演習の学習方法に関する教育成果の調査	1
	臨床実習からの授業評価	実習で学生が経験した看護技術の現状から授業形態の在り方について検討	1
		臨床実習の清潔援助技術の体験から学内演習の方法について検討	1
清拭方法のエビデンスに関する研究	教員の指導内容の評価	全身清拭の技術演習における複数教員による演習指導についての学生評価	1
	看護師の認識からの評価	看護師が学生時代に体験した演習内容とその妥当性に関する看護師の認識の調査	1
	清拭方法のエビデンスに関する研究	清拭の湯温の適温管理に関する実験	1
			1

表3 臨床現場と教育内容との乖離

文献	臨床と教育内容の乖離について記載内容
高橋清美ら ⁸⁾ (2005)	<ul style="list-style-type: none"> ・清拭に蒸しタオルを使用するかという問いに「いつも使用する」79.0%、「全く使用しない」13.0% ・清拭はタオルを湯で洗って実施するかという問いに「全く行わない」49.0%、「いつも行う」19.0%
三輪木君子ら ¹¹⁾ (2006)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で習った方法と違うと答えた看護師は95.1%であった。 ・使っていない物品では、ピッチャー70.7%、綿毛布66.6%、バケツ61.3%、ウォッシュクロス58.9%、ベアソン58.9% ・方法で違うところ、「清拭時間」「水分のふき取りなし」「タオルの扱い」「保温のための覆いなし」 ・学校で習った方法で行わない理由は、「業務が忙しく、時間的余裕がない」「原理原則を守っていれば応用でよい」「できるだけ短時間でいい、患者に負担を掛けたくない」「学校で習った方法は物品がたくさん必要」「学校で習った方法は時間が掛かる」
青木光子ら ¹²⁾ (2006)	<ul style="list-style-type: none"> ・学内での演習方法との違いがみられた清拭の看護技術の方法は、清拭の対象者、清拭方法、陰部の清潔方法、清拭をする部位の順番、清拭時に実施された処置であった。 ・清拭方法では、臨床は12場面すべて蒸しタオルを用いた実施であった。
馬醫世志子ら ¹⁴⁾ (2008)	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書では、「石けん+ウォッシュクロス+お湯」を用いた清拭がスタンダードであるが、臨床では「温タオル」を用いた清拭が普及していると考えられる。 ・教科書では、バケツ、ベアソン、ピッチャーが使用されているが、温タオルを使用しているため使用する物品にも変化がある。
石川美智子 ²⁴⁾ (2014)	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床実践家が求める全身清拭の知識項目では、「露出を最小限にする」「プライバシーの保持のため、バスタオルで覆う」は、臨床では行われていなかった。 ・全身清拭の手順に関する比較では、使用物品（バケツ、湯）と洗浄剤塗布前に肌を蒸す予洗い、乾布で水分を拭きとる、覆いをかけて露出を最低限にするの4項目で相違があった。
加藤木真史ら ²⁷⁾ (2016)	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床家はウォッシュクロスの使用について、「使用していない」61.2%、「使用している」15.8%、「知らない」17.3% ・臨床家は、清拭は「タオルのみ」45.2%、「石鹸（固形または液体）を使用」が20.6%、「沐浴剤を使用」21.8%、看護教員の60.5%は、石鹸を用いた方法を教えていた

「事例を用いた演習の評価」¹⁶⁾¹⁸⁾(2件)については、事例設定し患者役を学生が体験することからの学びを分析した研究、設定した事例患者に適した援助が実施できたかを評価した研究であり、事例設定し患者体験する中で、快・不快の感じ方に影響することやその一方で、患者に適した技術の提供については疾患を踏まえた援助に課題があることが示されていた。「教員や先輩学生の参加型演習の評価」⁶⁾²⁰⁾²³⁾(3件)については、教員が模擬患者になることや教員が学生に対して援助技術を提供することで、対象への配慮や関心の高まりや感覚的な技術の理解につながることを示されていた。「授業プログラムの工夫の評価」⁵⁾⁷⁾¹⁷⁾(3

件)の研究では、教科書に記載された清拭の方法と患者が選択した内容の清拭による清潔概念の広がりには差がなかったこと、必要な看護技術を自選する能力育成に寄与する教育方法の開発についての評価では、清拭が様々な要素を統合して実施することが求められる比較的難易度の高い技術であるため、ほかの技術より理解度が低かったことが示されていた。「臨地実習の経験からの授業評価」⁹⁾²⁵⁾(2件)については、いずれも臨地実習の技術経験から学生が求める看護技術の教育内容や授業形態の評価を行った研究であった。「教員の指導内容の評価」¹⁰⁾(1件)についての研究は、学生評価から演習の教員指導の評価を質的に分析した

内容であった。「看護師の認識からの評価」¹³⁾ (1件) は、看護師が学生時代に体験した演習内容と妥当性を看護師の認識から評価分析した研究であった。

3) 「清拭技術の習得度に関する研究」

清拭技術の習得度に関する研究については、以下の4件であった。

「全身清拭の技術習得度の自己評価分析の研究」¹⁵⁾ (1件) の内容は、石鹸を用いた全身清拭の演習終了後に、自己評価（認知領域・精神運動領域・情意領域に分けた評価項目19項目）を行い、その技術習得度を分析したものであった。また、「臨床実習の経験から習得度の状況を調べた研究」⁹⁾ ²⁵⁾ (2件) では、臨床実習における看護技術の経験状況及び卒業するまでに求められる技術水準への到達状況を分析した内容であった。「技術習得における困難についての研究」²⁶⁾ (1件) は、全身清拭の演習終了後の演習評価表から技術習得上学生が困難と感じている内容について分析する内容であった。

4) 「清拭方法のエビデンスに関する研究」

この研究²²⁾ については、清拭の湯温の適温管理に関する実験を行いエビデンスの構築について研究した内容であった。

3. 「清拭演習の内容」の詳細が記載のある文献の整理

「清拭演習の内容」が詳細に記載されている7つの文献について、目的、授業構造（組み立て）、演習内容、演習の特徴・工夫点について表4に整理した。

ジグソー学習法（グループ学習法の一つ）を用い教育成果を分析した研究⁵⁾ については、基礎看護技術の習得度を高めるために学生個々に清拭技術とその根拠についての主体的学習の強化と徹底した技術の個別指導を行うという授業の工夫がされ、その結果、学生の責任感に基づく学習意欲の向上と主体的な学習行動、看護技術の基本を重視した技術習得が可能であることが報告されてい

た。全身清拭の技術演習に複数の指導教員で指導する方法の評価についての研究¹⁰⁾ では、理解が深まるなどの肯定的な評価が多い中で、指導内容の統一性、一貫性についての課題も明らかとなっていた。学生の清潔技術の習得度について調査した研究¹⁵⁾ では、学生が技術習得できるように演習と技術評価の2段階に分けて教員が技術習得度を確認し、教育方法を工夫した。結果として、「お湯の適切な温度調整」「拭く時の関節の支え」「綿毛布・バスタオルを使用した保温」「皮膚の生理機能が説明できる」「患者に全身清拭の必要性を説明できる」についての習得度が低いことが報告されていた。教科書に記されている清拭の方法と患者が選択する方法の清拭の比較を行った研究¹⁹⁾ では、演習方法の違いによる「清潔」に対するイメージの変化に差はないが、選択する方法では、患者の個別性をイメージし反応語がみられたことが示されていた。先輩看護学生参加型の演習に関する研究²³⁾ では、先輩参加型の演習の方が、看護技術の理解、習得、動機付け、学習意欲の向上に効果があることが示唆された。これは、マンパワーの充足という背景と原理原則、根拠を重視する教員の助言とは違い、先輩の助言は技術の手技やエビデンスだけではなく実習経験を通した助言であり、助言の活用度が高かったためと推測されていた。教科書に準拠した演習と臨床との技術の違いを検討した研究²⁴⁾ では、露出やプライバシーの保持、使用物品（バケツ、お湯）と予洗い、水分の拭き取り、所要時間に相違があることが明らかとなった。全身清拭の技術習得における「困難」について調査した研究²⁶⁾ では、個別性に基づいた計画立案と実施、患者を尊重した対応などが困難であることが示されていた。また、単元の構造や学習目標から、「皮膚の生理機能」「安全・安楽」「皮膚の露出を最小限」「皮膚のマッサージ効果」「お湯の温度管理」「プライバシーの保護」「個別性」が共通してあげられ、演習の狙いとなっていた。

表4 「清拭演習の内容」の詳細が記載のある文献

研究目的	授業構造 (組み立て)	単元日時の記載	演習の特徴・工夫点	演習の内容	結果
緒方 巧 (2004)	<p>○授業方法：シグナー学習法 (グループ学習法の1つ) 第1段階授業：講義「皮膚の生理」(身体の清潔と清潔)を話し合う(40分) 第2段階授業：事前学習レポート 第3段階授業：技術演習(授業前日までに技術評価と個別指導第4段階技術演習：部分清拭 (90分)、足浴と除菌洗淨 (90分))</p>		基礎看護技術の習得度を高めるための授業方法として、カウチンパー・ト・セッションの際と学生個々の基礎看護技術の習得を目的とした技術とその根拠に基づいた主体的学習の強化	<p>○第4段階：学習課題 (部分清拭、全身清拭、足浴、足浴と除菌洗淨) 看護師役、患者役、観察者をローテーションして実施。</p>	<p>・「互いにもいかに」(少人数学習により理解が深まるとともに)「観察者が熱心に教える」の「達成」が高い。 ・シグナー学習法は責任感に基づき学習意欲の向上と主体的な学習行動、看護技術の根本を重視した技術習得を可能にすることが認められた。</p>
津田 右子 (2006)	<p>○指導目標 1) 皮膚の清潔の重要性を認識し、清拭実施中はその温度を体感するよう指導する。 2) 皮膚の清潔を必要としない理由を説明し、清拭の目的を説明すること。 3) 皮膚の清潔を必要とする理由を説明し、清拭の目的を説明すること。 4) 皮膚の清潔を必要とする理由を説明し、清拭の目的を説明すること。</p>		全身清拭の技術演習に複数 (10人) の指導教員で指導する方法	<p>○事例対象：発汗の多い臨床患者 ○清拭の方法は石鹸清拭とする。 ○職員による全身清拭のデモンストレーション後、学生が実施。</p>	<p>・「理解が深まる指導」「学習の喜びや意欲がわく指導」「教員への安心感」という肯定的な評価も得られた。 ・「それ以外の先生でいうことと違う」「先生によって違うので混乱する」「先生同士の意見を統一したい」という評価、細かいところまで指導してほしい」という多人数の指導教員の指導内容の統一が不十分</p>
藤田 佳代子 (2008)	<p>○教育方法 講義→事前学習→演習→事前学習→技術評価→事後学習</p>		清拭と技術評価の段階に分けて教員が技術習得度を測定している。	<p>○事例：閉鎖病棟にありベント上安静の状態で患者の患者 ○事例内容：浴衣タイプの履き方をベント上で履く姿勢、石けんを用いた全身清拭、履き替え、足浴を行う ○履き替えの方法は石鹸清拭とする。 ○履き替えの方法は石鹸清拭とする。 ○履き替えの方法は石鹸清拭とする。 ○履き替えの方法は石鹸清拭とする。</p>	<p>・精神運動的知識の「お湯の適切な温度調整」「拭き取る際の適切な動き」「履き替え、石けんをかける際の適切な動き」の自己評価が高く、認知領域の「皮膚の生理機能」の理解も高いことがわかった。 ・全身清拭の必要性を説明できる」が低い。</p>
注 藤子 (2009)	<p>○清拭「清潔の援助」における清拭の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>		これまで公的教材は、原則原則を学ばせるための目的から、教員と患者との関係性、清拭の目的、清拭の方法、清拭の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。	<p>○講義終了後、教員が演習の最初に標準法全身清拭のデモンストレーションを行う。 ○学生全員が演習時間内に1回の全身清拭を行う。 ○患者役が標準法全身清拭のグループと観察法全身清拭のグループに分ける。 ○観察法全身清拭：観察者に観察されている使用物品 (固形石鹸、ハンドソープ) の使用法を説明する。 ○標準法全身清拭：観察者に観察されている使用物品 (固形石鹸、ハンドソープ) の使用法を説明する。</p>	<p>・「清潔」に対するイメージは演習方法の違いによって異なるとは等しい。 ・観察法では、個別性につながる反応語が見られた。</p>
米田 照彦 (2012)	<p>○単元「清拭 (履き替えを含む)」の目標 1) 単元「清拭」の目標を達成し、履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 2) 単元「清拭」の目標を達成し、履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>		履き替え (履き替え) と事前学習 (履き替え) を行う。履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。	<p>○教員主導型：1グループ5名、患者役、看護師役、援助技術の手技確認後に履き替えを行う。 ○教員参加型：履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>	<p>・先参加型演習は、従来の教員主導型演習と比較して、看護技術の理解、習得、動機付け、学習意欲の向上に効果があったと考えられる。</p>
石川 美智子 (2014)	<p>○単元「清拭 (履き替えを含む)」の目標 1) 単元「清拭」の目標を達成し、履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 2) 単元「清拭」の目標を達成し、履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>		1) 人間にとっての清潔を体感し、目的を説明できる。 2) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 3) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 4) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 5) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 6) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。	<p>○教員主導型：1グループ5名、患者役、看護師役、援助技術の手技確認後に履き替えを行う。 ○教員参加型：履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>	<p>・履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 ・履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>
藤尾 麻衣子 (2015)	<p>○単元「清拭 (履き替えを含む)」の目標 1) 単元「清拭」の目標を達成し、履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 2) 単元「清拭」の目標を達成し、履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>		1) 人間にとっての清潔を体感し、目的を説明できる。 2) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 3) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 4) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 5) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 6) 清潔の重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。	<p>○事例「右足腫れがあり足浴時に患部を清潔にする」を履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。</p>	<p>・全身清拭の技術習得における「困難」 ①個別性に合わせた指導が不足していること ②履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 ③履き替えの重要性を説明し、患部に合わせた清拭の方法を説明し、効果的な清拭の方法を説明する。 ④目的に合わせた物品配置 ⑤緊張感のある中での実施</p>

V. 考察

1. 研究の概要

表1に示すように、本研究においては2005年から2009年の5年間で14件(60.9%)とこの期間に集中して掲載されていた。このことは、看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書等が2003年に発行されるなど、看護基礎教育における技術教育の重要性の高まりが背景にあると考えられる。研究の対象者については、看護学生を対象としたものが15件(65.2%)、看護師を対象としたものは6件(26.1%)であり、看護学生については演習の評価や技術習得度について、看護師については主に臨床で実施されている技術の実態を把握するための研究で対象となっていた。「清拭演習の内容」の詳細が記載されている文献については7件(30.4%)と清拭の演習の構造や教授している清拭の具体的方法について記述がされている研究が少ない傾向にあった。

2. 研究の動向について

清拭の演習に関する研究については、「基礎教育と臨床の技術の乖離に関する研究」、「清潔技術の習得度に関する研究」、「清拭演習内容の評価に関する研究」、「清拭方法のエビデンスに関する研究」の4つのカテゴリに分類された。臨床と教育の乖離について分析している研究で、乖離している点については、清拭の方法・使用物品があげられる。教育では、国内の多くの教科書に記載されているように、お湯を使い、ウォッシュクロスを使用しての演習が行われているが、臨床現場では、ディスポーザブルの不織布のタオルが使われ、お湯を使用しない方法で行われており、それにともない特に、ピッチャー、ベースン、綿毛布、ウォッシュクロス、石鹸などは使用されていない傾向にある。また、臨床では、プライバシーの保護、保温のための覆いの使用をしていないことも文献上明らかとなっていた。理由としては、患者の苦痛を考慮し、時間短縮を優先としてとしているが、このことから使用物品のみではなく、清拭の原理

原則においても教育機関での教育内容と異なっていることが推察される。

2006年のBacillus cereusによる清拭タオルの感染が発表されて以後、2009年に医療機関における院内感染対策マニュアルの作成のための手引きが公表されたが、その後もBacillus cereus菌の検出事例が報告されている。中山ら²⁸⁾は、感染対策のためにはディスポーザブル清拭タオルの使用が安全であるとし、松村ら²⁹⁾は、化繊タオルは保温性と肌触り感では綿より化繊タオルの方が優れていると報告している。臨床場面では、感染症予防や時間短縮という点においては、ディスポーザブルタオルが優先されている。COVID-19のように未知の感染症を含めた感染症対策を考慮すると、ウォッシュクロスだけではなくディスポーザブルの不織布タオルでの清拭方法についても学内演習で取り入れることを検討する余地がある。この現状を踏まえ、基礎看護教育において清拭の方法はもとより、清拭の原理・原則とは何かを今一度明確にする必要があると考えられた。

一方、ベナー³⁰⁾は、「原則は、実際の状況で何を優先すべきか教えてくれるわけではないので、原則に従うことは、かえって実践を成功させる妨げになる。」と述べていることから、学内での演習については、手順を覚えるのではなく、根拠に基づいた援助方法の工夫や演習事例の状況に合わせた清拭の方法を選択できる実践能力の育成が必要である。そのためには、看護師の清拭に関するコンピテンシーを明らかにし、基礎看護教育で押さえておかななくてはならない原理原則を再整理していく必要があると考えられる。

3. 現在行われている清拭の演習と今後の清拭演習の方向性

「清拭演習の内容」の詳細が記載のある文献については、7件と少なかった。清拭の具体的方法についての検討よりは、事例設定の工夫や授業プログラムの組み込み方やその工夫と効果についての研究が行われていることが明らかとなった。特

に、授業プログラムの組み込み方やその工夫については、学生の主体性や意欲を引き出し、学生の理解を追求することにプログラムの工夫がされていた。これらプログラムの工夫は、学習効果のみならず看護職には生涯にわたり、主体的に学習していく姿勢の育成にもつながるため、主体性を引き出す教育プログラムの開発は重要である。また、各演習の目標からは、「皮膚の生理機能」「皮膚のマッサージ効果」「お湯の温度管理」「安全・安楽」「皮膚の露出を最小限」「プライバシーの保護」「個別性」というキーワードが抽出されたことから、現在の看護基礎教育の中では、これらのことが原理原則として踏まえられていると考えられる。しかし、看護基礎教育の中で教授されている内容と臨床現場での乖離がある中で、現在の看護師の清拭に関するコンピテンシーを明らかにし、基礎看護教育で押さえておかななくてはならない原理原則を再整理していく必要があると考えられる。教員が一方向的に清拭について教授するだけではなく、学生自らが清拭に必要な原理・原則は何かを考え、患者の個別性を考慮した中で、必要な清拭の方法を学生自らが選択し、実践する能力を養うことができる教育プログラムの開発が必要と考える。

VI. 結論

看護系大学における「清拭」技術の演習に関する研究の内容を分析し、その研究の動向を明らかにし、今後のこの領域における基礎的な資料を得ることを目的に文献を整理した。その結果、清拭の演習に関する研究については、「基礎教育と臨床の技術の乖離に関する研究」、「清潔技術の習得度に関する研究」、「清拭演習内容の評価に関する研究」、「清拭方法のエビデンスに関する研究」の4つに分類した。臨床と教育の乖離をうめていくためには、単に手順や使用物品を現場に合わせるのではなく、清拭の原理・原則とは何かを今一度明確にする必要と看護師の清拭に関するコンピテンシーを明らかにし、清拭に必要な原理原則を再整理し、患者の個別性を考慮した中で、必要な

清拭の方法を学生自らが選択し、実践する能力を養うことができる教育プログラムの開発の必要性が示唆された。

文 献

- 1) 高橋清美, 佐藤友美, 加藤法子, 笹尾松美, 瀧野由夏, 永嶋由理子, 中野榮子: 看護基礎教育における看護技術教育に関する一考察 臨床における実態調査をもとに. 福岡県立看護大学紀要, 3: 39-46, 2005.
- 2) 看護基礎教育における技術教育の在り方に関する報告会: 看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書, 1-8, 2003.
- 3) 井沢義男, 伊藤誠: Bacillus cereusによる偽アウトブレイクと清拭タオルの管理について. 日本臨床微生物雑誌, 15: 20-27, 2005.
- 4) 鈴村初子, 春田佳代, 相撲佐希子, 諏訪美栄子, 中村美奈子, 村山友加里: 清拭タオルについての文献検討—2007年から2016年における清拭タオル文献から—. 修文大学紀要, 8: 49-58, 2016.
- 5) 緒方 巧, 田中静美, 本田容子, 原田ひとみ: ジグソー学習法による基礎看護技術「身体の清潔」の教育成果と課題. 藍野学院紀要, 17: 91-98, 2004.
- 6) 白川恵美子, 前澤美代子, 小林たつ子: 基礎看護技術教育における安全性を追求した教員モデルの学習効果—学生が教員から『快』の感覚体験を受けて—. 日本看護学会論文集 看護教育, 36: 30-32, 2005.
- 7) 伊藤靖代, 深田美香, 松田明子, 笠城典子, 南前恵子, 内田宏美: 臨床実践能力育成のための看護教育プログラムの評価 演習記録の分析をとおして. 米子医学雑誌, 56 (4): 158-163, 2005.
- 8) 高橋清美, 佐藤友美, 加藤法子, 笹尾松美, 瀧野由夏, 永嶋由理子, 中野榮子: 看護基礎教育における看護技術教育に関する一考察 臨床における実態調査をもとに. 福岡県立看護

- 護大学紀要, 3 : 39-46, 2005.
- 9) 上野典子, 平野ゆき子, 辺田智子, 根本友子, 永重英子 : 学生が求める清潔援助技術の教育内容 - 臨地実習における学生の清潔援助技術経験状況をふまえて - . 日本看護学会論文集, 看護教育, 37 : 209-211, 2006.
 - 10) 津田右子, 西澤三代子, 柴田京子, 武井功子, 入江寿美代, 平岡正史, 古屋敷明美 : 基礎看護技術演習にかかわった10人の教員への学生評価からの指導評価 - 看護学生の自由記載法による全身清拭技術演習の指導内容評価への質的分析から - . 看護学統合研究, 8 (1) : 10-18, 2006.
 - 11) 三輪木君子, 竹田千佐子, 米倉摩弥 : 臨床における「清拭」の実態と看護師の認識 - 教育内容と創意の要因を探る - . 日本看護科学学会学術集会公演集, 26 : 351, 2006.
 - 12) 青木光子, 関谷由香里, 岡田ルリ子 : 清潔の援助技術の教育内容に関する検討 - 臨床の清拭場面の参加観察を通して - . 日本看護学会論文集, 看護教育, 37 : 221-223, 2006.
 - 13) 大西香代子, 大串靖子 : 基礎看護技術演習の体験に関する遡及的調査. 三重看護学誌, 9 : 89-95, 2007.
 - 14) 馬醫世志子, 佐藤晶子, 城生弘美 : 学内における基礎看護技術演習についての - 考察 - 教科書比較による全身清拭の検討 - . 群馬パース大学紀要, 6 : 65-70, 2008.
 - 15) 藤田佳代子, 弓削なぎさ, 川本利恵子, 米田由美, 村瀬千春 : 清潔援助の技術習得過程における自己評価と学習方略との関係. 産業医科大学雑誌, 30 (1) : 83-93, 2008.
 - 16) 河本幸子, 齊藤雅子, 黒崎美由紀, 藤原敏恵, 三宅和代, 河野恵子, 新田幸子 : 看護学生の基礎看護技術教育にイメージ事例を組み入れる試み. 岡山済生会総合病院雑誌, 40 : 30-32, 2008.
 - 17) 牧野美幸 : 基礎看護実習における看護技術の習得状況の比較 - ドレイファスの技術獲得モデル 第1段階・第2段階に準じて - . 神奈川県立保健福祉大学誌, 5 (1) : 55-62, 2008.
 - 18) 河本幸子, 河野恵子 : 患者役体験による看護学生の学び - 技術演習終了後の課題レポート分析より - . 岡山済生会総合病院雑誌, 41 : 56-58, 2009.
 - 19) 辻 慶子, 濱野香苗 : 単元「清潔の援助」における演習方法の違いによる清潔イメージの比較 - 連想法調査を用いて - . 日本看護学教育学会誌, 18 (3) : 55-61, 2009.
 - 20) 社本生衣 : 看護技術育成の向上を目指した基礎看護学演習の試み - 模擬患者に教員を導入して - . 椋山女学園大学看護学研究, 3 : 59-67, 2011.
 - 21) 成 順月, 佐々木秀, 山内京子, 加藤重子, 松井英俊, 岡平美佐子, 村松真千子, 岡本智子, 奥田泰子, 島内節 : 臨地実習による看護技術の経験及び技術水準の到達状況 - 看護学生の「看護技術経験録」から - . 看護学統合研究, 14 (1) : 1-12, 2012.
 - 22) 藤野靖博, 加藤法子, 於久比呂美, 瀧野由夏, 津田智子, 永嶋由里子 : 清拭時の湯を適温に維持・管理するための方法の検証. 福岡県立大学看護学研究紀要, 10 (1) : 33-38, 2012.
 - 23) 米田照美, 伊丹君和, 松宮 愛, 中西佳子, 西久保奈央子 : 先輩看護学生参加型の看護技術演習における協同学習への取り組み. 人間看護学研究, 10 : 43-49, 2012.
 - 24) 石川美智子 : 基礎看護技術教育における「全身清拭」の演習方法に関する検討. 獨協医科大学看護学部紀要, 8 : 89-97, 2014.
 - 25) 坂田五月, 佐藤道子, 篠崎恵美子, 渡邊順子, 藤井徹也 : 分散型基礎看護学実習Ⅱにおいて学生が経験した看護基本技術の現状. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 22 : 27-36, 2014.
 - 26) 藤尾麻衣子, 藤谷章恵, 鈴木聖子, 安藤幸枝, 志賀由美, 香春知永 : A大学看護学部学

生が技術習得において抱いている「困難」：
一時的導尿と就床患者の全身清拭に焦点をあ
てて．武蔵野大学看護学研究所紀要，9：19-
28，2015．

- 27) 加藤木真史, 菱沼典子, 佐居裕美, 大久保暢子,
伊東美奈子, 大橋久美子, 蜂ヶ崎令子：看護
技術の実態調査－清潔ケア, 感染予防, 周術
期ケアに関する分析－. 日本看護技術学会誌,
15 (2) : 146-153, 2016.
- 28) 中山絵美, 中島あゆ美, 森光千春, 松本由布
子, 鳥居まり：清拭車の一般細菌検査に基づ
く清拭タオルのディスポーザブル導入検討に
ついて．環境感染, 23 : 234, 2008.
- 29) 松村千鶴, 深井喜代子：多次元評価指標によ
る綿タオルと化繊タオルの部分清拭効果の比
較．日本看護技術学会, 13 (3) : 188-199,
2014.
- 30) パトリシア ベナー：ベナー看護論－初心者
から達人へ－. 井部俊子監訳:17-18, 東京、
医学書院, 2005.